

**平成23年度
日本人学生の
「国際ボランティア支援基金」**

当財団では、日本人学生を対象に、アジアに関する「国際ボランティア」の企画を募集し、採用された企画に資金支援（1 口 15 万円）を行っています。
2011 年度は 1 名の採用がありました。

●採用者：長谷川由樹（関西学院大学 3 年）

●事業概要

事業名	第 2 回国際協働プロジェクト
主催	日本国際学生協会
開催地	国外活動：フィリピン共和国ルソン島中西部マニラ、パナイ島イロイロ州イロイロ市
実施期間	国内活動：2010 年 11 月～2011 年 11 月 国外活動：2011 年 9 月 6 日～18 日
内容	国内活動：「事前勉強会」、「国外活動報告会」 国外活動：「マニラ活動」、「交流活動」、「フィールドワーク活動」、「協働活動」
実施目的	国内活動：子ども達への国際協力・国際協働のきっかけ作り 国外活動：子ども達のための継続性のある協働活動

●事業日程

日程	活動内容	場所
9 月 6 日	フィリピン・マニラ着、ホテル着	
9 月 7 日	ユニカセ着 インタビュー SM モール着 ホテル着	ユニカセ
9 月 8 日	マニラ観光 エコミスモ着 家庭訪問・インタビュー ホテル着 マニラ発・イロイロ着	エコミスモ
9 月 9 日	フィリピン人キャンパーとアイスブレーキング オープニングセレモニー ナバイス村散策	LOOB BASE LOOB BASE
9 月 10 日	Weekend Kids Activity（英語カルタ） Dumpsite Tour UCLA 訪問	カラフナン ダンプサイ ト
9 月 11 日	廃食油キャンドル作り	各ホームステイ先
9 月 12 日	Work Activity	ナバイス小学校

	授業見学	ナバイス小学校
9月13日	食育活動 歯磨き活動 食育活動	ヒバワン小学校 ヒバワン小学校 ヒバワン小学校
9月14日	調理実習・オーガニックガーデンセミナー 歯磨き活動 音楽活動	マンドリアオ小学校 マンドリアオ小学校 ヒバワン小学校
9月15日	Work Activity 歯磨き活動 音楽活動	ナバイス小学校 ヒバワン小学校 ヒバワン小学校
9月16日	Work Activity	ナバイス小学校
9月17日	Work Activity フレンドシップナイト	ナバイス小学校 ナバイス小学校
9月18日	Closing Program イロイロ発・マニラ着 マニラ発・帰国	ナバイス小学校

●参加者名簿

	氏名	学校・学年
1	長谷川 由樹	関西学院大学 3 年
2	西村 まどか	同志社女子大学 3 年
3	佐武 里砂	同志社女子大学 2 年
4	原田 道乃	甲南大学 2 年
5	田頭 太一	関西学院大学 2 年
6	横治 航太郎	関西学院大学 3 年
7	坂下 佳穂	神戸松陰女子学院大学 2 年
8	南井 愛加	同志社大学 2 年
9	吉元 聡子	北九州市立大学 2 年
10	玉井 毅	関西学院大学 2 年
11	郡山 めぐみ	関西学院大学 2 年
12	針崎 万麗夜	北九州市立大学 2 年
13	山内 菜摘	関西学院大学 2 年

	氏名	学校・学年
14	猪谷 枝璃	同志社女子大学 3 年
15	高橋 優美	同志社女子大学 3 年
16	和田 俊介	甲南大学 4 年
17	二宮 奨	甲南大学 2 年
18	小幡 岬	甲南大学 1 年
19	高倉 美幸	関西学院大学 2 年
20	鳥丸 大貴	関西学院大学 2 年
21	福井 真惟	関西学院大学 2 年
22	白井 優	関西学院大学 1 年
23	吉川 萌実	関西学院大学 1 年
24	相良 康太	関西大学 2 年
25	濱本 安理沙	神戸女子学院大学 2 年
26	岡村 麻以	武庫川女子大学 1 年

●採用者感想文

『国際協働という成長の場』

(長谷川 由樹 関西学院大学 経済学部 3年)



国際協働プロジェクトは、大きく分けて2つの面から私を成長させてくれた。

1つ目は、自ら目的・目標を設定し、主体性をもって企画を実行することの難しさを知った点にある。学生が行う国際協働において、明確な答えやゴールはなく、自分たちで考えなければならない。また、フィリピンに行っても私たちは単なる「お客さん」ではなく、ともに現地の課題に取り組む、企画の運営者である。よって、自らの企画の目的を設定する難しさや、フィリピンという慣れない土地で主体性を持って行動しなければならない責任感に、私自身挫けそうになったこともあった。しかし、企画に携わってくれた日本人参加者や、現地の方々の助けがあったから、企画と真摯に向き合えたのだと思う。

2つ目は、協働活動を行うことについて理解が深まったという点にある。現地の課題解決という点では、この活動で得られた成果はわずかなものかもしれない。協働活動は、経験の乏しい学生である私たちにとって、簡単なものではなかった。しかし、「フィリピン」という国を、日本で持つイメージにとどまらず、日本人参加者が肌身で現地の方々の生活や考えを感じられたことに、大きな意義を感じる。フィリピン人・日本人という「国」や「人種」のイメージとしてではなく、一人の「人間」として一対一で互いを知っていくこと、この一步が何よりも大切であると感じた。

プロジェクトを終えてから、フィリピンにもう一度帰りたいと何度願ったかわからない。それほどに、フィリピンで過ごした思い出・企画に携わった約1年間は、私にとって大きな存在になった。何物にも代え難い素敵な時間を過ごしたと思う。今後も国際協働プロジェクトが、プロジェクトに関わるすべての人々にとって、より意義高いプロジェクトとなっていくことを願う。

